

“手”の基本義とその意味拡張¹
A Study of the Basic Meaning and Sematic Extension of Chinese "Shou"

日下部 直美
Naomi KUSAKABE

I. はじめに

現代中国語の身体部位名詞である“手”は身体部位を表す意味から異なる意味へと拡張している。本稿では、認知言語学の視点から「メタファー」、「メトニミー」などの概念を用い、身体部位名詞の“手”が基本義から他の様々な意味へと拡張している認知メカニズムについて分析を行う²。

II. “手”の基本義

“手”の基本義は、身体部位としての<手>であり、この<手>にはいわゆる「腕」の部分は含まれず、手首から先の部分を指す³。以下にその例を挙げる⁴。

- (1) 我费劲抽出一只手用力打高洋的脸。 (王朔:《看上去很美》)
[私は片手をぐっと出し、高洋の顔を力一杯殴った]

次に、この基本義から拡張したと考えられる“手”の意味について見ていくことにする。

III. “手”のメトニミーに基づいた拡張

1. 部分—全体の関係

“手”は「手」という<身体部位>を指す意味から、<人>を表す意味へと拡張していると考えられる場合がある。例えば以下の例を見てみよう。

- (2) 在男子气手枪比赛中, (…中略), 中国选手许海峰获得这个项目的第6名, ……。
[男子空気銃の試合では、(…中略)、中国の選手の許海峰が本種目で第6位となり、…]
(3) 在短短两个月的时间内, 全国就有23个省(区、市)111个县向全国组委会推荐歌手168名, 其中, 男歌手67名、女歌手101名, ……。
[2ヶ月という短い期間内において、全国では23の省(区、市)の111の県から全国

¹ 本稿は、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した修士論文の一部を大幅に加筆・修正したものである。

² 本研究で用いるメタファー、メトニミーの概念として、靱山(2002)p.65、76の定義に従う。この定義は、佐藤(1978)(=1992)の考え方に基づき、まとめたものである。

³ 記号<>は意味を表し、【 】は概念を表す。以下これに従う。

⁴ 引用例文の出典は、例文の後に作者と作品名を付けてある。出典が記載されていないものは「北京語言大学中国語コーパス」: 北京语言大学汉语语料库 (BCC)

(<http://bcc.blcu.edu.cn/>) で検索したものである。例文の日本語訳は筆者による。

組委会に推薦した歌手が 168 名おり、その中には、男性歌手が 67 名、女性歌手が 101 名で……]

(4) 黄益冲却坚辞不就：“让李矛做主教练，我给他当助手。”

[しかし、黄益冲は「李矛にメインコーチをしてもらい、私は彼の助手になるよ」と頑なに辞退した]

この場合、身体の一部という具体物から、〈人〉という具体物を表す意味へと拡張されたのであるということが出来る。“手”は「人」にとって重要な役割を担っている「身体部位」の一部であり、また主として意識的に対象物に触れることが多い部分であると考えられる。

靱山(2002)pp.77-78 は、日本語における身体部位の「手」の例を挙げて次のように述べている。

本来、部分を表す語で全体を表すという場合、部分として選ばれるものは、全体を構成する他の部分と比べて、何らかの意味で重要であるもの、あるいは顕著性が高いものであると考えられます。たとえば、「手」は仕事などを行うという観点からは、身体の各部分のなかで最も重要なものでしょうし、……

人間は「もつ」、「なげる」、「つかむ」、「さわる」などといったように、手を使って動作・行為を行うことが極めて多い。つまりこれは、人間にとって「手」という身体部位は、意識的に外部世界に存在するモノに対して、動作・行為を積極的に行う身体部位の一つであり、そのモノに接する、または働きかけるときに用いる身体部位であるといっても過言ではない。したがって、「手」という身体の一部で「人」を表すことが出来るものであると推測できる。

2. 参照点構造に基づいた拡張

「手」を用いて様々な行為を行うことが出来ることから、〈行為〉そのものを表す場合がある。

(5) 若不是曹植七步成诗，难逃曹丕毒手。

[もし曹植が七歩の詩を作らなければ、曹丕の酷い仕打ちから逃れることは困難であった]

これは、「手」は詳述したような「もつ」、「なげる」、「つかむ」、「さわる」等の様々な行為を行うことが出来るため、「手」を参照点として、それを言語化することで〈手を用いた行為〉、さらに、これに止まらず、上の“毒手”の場合は、〈方法〉や〈手段〉といった抽象的意味へと拡張した例であると考えられる。

即ち、「手」という〈身体部位〉という具体的意味である領域から、〈方法〉や〈手段〉といった抽象的意味の領域へとメタファー的拡張を行っていることが分かる。したがって、参照点構造に基づいたメトニミー的拡張と、領域から領域へのメタファー的拡張が行われてお

り、メタファーとメトニミーの融合として見なすことができる。

さらに「手」が量詞として〈技能〉や〈腕前〉を数える場合に用いられる例を見てみよう⁵。

(6) 小时候他家里很穷，是老校长买了书和笔支持他学练书法，激励他练出一手好字。

[彼は小さい頃、家が貧しかったので、前校長が本と筆記用具を購入して彼の勉学を支援し、上手な字が書けるよう励ましていた]

(7) 从今以后，你既是她们的大姐，也是她们的教师，多传授给她们几手本领。

(姚雪垠：《李自成》)

[これからはあなたが彼女たちの姉であり、教師でもあるので、彼女たちに技術を伝授してあげなさい]

これは、人間は「手」で仕事や作業などといったさまざまな行為を行うため、「人間が行う作業」と「手」は密接な関係があるといえることができる。このとき、「手」を参照点とした〈手を用いて行う行為〉が存在しており、それと〈技能〉や〈腕前〉といった意味を思考内で結びつけて捉えていると考えられる。

上述の〈方法〉や〈手段〉といった抽象的意味への拡張と同様に、この場合も〈身体部位〉という具体的意味から抽象的意味である〈手を用いて行う行為〉としてメタファー的拡張が行われ、〈技能〉や〈腕前〉という意味へと拡張していることが分かる。したがって、この場合もメタファーとメトニミーが相互に関連していると推察できる。

IV. 【接触】のスキーマに基づいた拡張

人間は外部世界に存在する対象との接触を行うことで、さまざまなモノやコトガラを知覚し、認識している。人間の身体部位のなかでも、「手」は外部世界の対象に触れることが多い部位であるといえる。このことから、この【接触】という行為は繰り返し行われ、概念化されると考えられる。

つまり、身体部位である「手」が行う【接触】という概念は、身体部位の「手」の支配領域内に存在しており、「手」を参照点としてアクセスしていると説明できる。

本章では、身体部位の「手」の意味拡張が、外部世界との【接触】に反映していると考え、【接触】のスキーマの概念を用いて「手」の意味拡張の分析を試みる。

以下の例は外部世界にある対象との【接触】を表している。

(8) 11月9日，参加在东京举行的第十九届世界女子网球团体赛的中国队和中国台北队在开幕式前愉快地握手。

[11月9日、東京で開催された第19回世界女子テニス団体戦では中国チームと台北

⁵ “手”が名量詞として用いられる場合として、“一手泥”[一掴みの泥]、“两手尘埃”[両手一杯の埃]等が挙げられるが、これは、数詞が“一”、“两”等に限られるため、張麗群(2000)が述べている“一+身体部位名詞”が“満”を表す用法に含まれるといえる。量詞として用いられる身体部位名詞は【容器】として見なされ、【内容物】は「実体」と「非実体」があり、【付着】の意味として見なされるが、身体部位の持つ形状・機能等が拡張した意味として見なされない。よって考察の対象としないこととする。

チームが開幕前に楽しく握手をした]

(9) 他挽住她的手，不要她走，又说：“你看你哭成这样，怎么能够出去？”

(巴金：《家》)

[彼は彼女の手を引っ張り、彼女を引き止めると、「そんなふうに泣き腫らして、出かけられるのか？」と言った]

(10) 陈北燕岿然不动，他把两手插入她的腋下，等于抱她起来。

(王朔：《看上去很美》)

[陳北燕は微動だにせず、両手を彼女の脇の下に差し込み、抱きかかえたようになった]

上の例文はいずれも外部世界に存在する具象物に直接「手」が【接触】していると考えられる。

さらに、「手」を用いた【接触】の概念は、抽象物に対しても用いられる。

(11) 我们准备马上着手调查研究工作，以迅速提出解决问题的具体措施。

[我々はすぐに調査研究に着手し、早急に問題を解決する具体的措置を提案するつもりだ]

(12) 紧紧扭住反对‘四风’，从群众最关心、最迫切的问题入手”，……。

[しっかりと「四つの悪風」問題に取り組み、民衆が最も関心を持ち、切迫している問題から手をつける]

(13) 并企图将所谓“西藏问题”国际化，呼吁一些国际势力插手“西藏问题”。

[また、所謂「チベット問題」の国際化を企み、一部の国際的勢力に「チベット問題」に介入するように呼びかけた]

“插手”は「手を差しはさむ」という具体的動作を表す場合から、例文(13)のように「介入する、参与する」という、直接「手」とは関係がない抽象的な動作・行為として使われる場合もある。これは、“手”が“插”という動詞と結びつくことによって、身体部位である「手」という意味が、【接触】のスキーマに基づいて抽象的意味へと拡張したためであると考えられる。即ち、参照点としての身体部位である「手」からその領域内に存在する<手を用いた行為>にアクセスし、メトニミー的拡張が行われ、そこから【接触】のスキーマを介して、別の領域にある抽象的意味へとメタファー的拡張が行われたと考えられる。したがって、この場合の意味拡張もメタファーとメトニミーの融合であると言える。

さらに、「手」による【接触】を行うことで、外部世界に存在する対象は主体に【接触】する。それが、主体が支配する領域に【接触】すると捉えられることで、「手」は<主体が所有する領域>という意味へと拡張する。

(14) 家里有什么开销，卖出一只羊去，400多元就到手了。

[家で何かの出費があったので、羊を一匹売り、400元余りを手に入れた]

上の例の“到手”は、具象物が主体の「手」のところへ到達したという意味としても捉えることもできる。また、直接主体の「手」の中へ収めることができる大きさの具象物でなくても、「(自分の)所有物とする」という意味としても捉えることができる。これは、まず、その対象と【接触】した上で、その対象を「自分の所有している領域」まで到達する(させる)と理解することができる。

このことから、この場合の“手”は、「手」という〈身体部位〉を指す意味から、抽象的意味である〈(自分の)所有する領域〉を表す意味へと拡張していることが分かる。即ち、「手」を参照点として具体的意味としての〈(自分の)所有する領域〉から【接触】のスキーマに基づいて抽象的意味へと拡張していることが分かる。したがって、上述した意味拡張と同様にメタファーとメトニミーの融合であると考えられる。

また、「手」が量詞として用いられる場合がある。

(15) 各个单位、各个组织的领导干部亲自去调查研究“第一手材料”尤其重要。

[各单位、各組織の幹部は自ら「一次資料」について調査することが特に重要である]

『中国語量詞 500』は、このときの“手”の意味として、「ある種の状況を掌握した順序」と説明している。即ち、これも、【接触】のスキーマに基づいた拡張であると解釈することができる。つまり、外部世界にある対象に「手」が【接触】するという行為に基づいた具体的意味から、その対象を〈主体が所有する領域〉に取り込むという経験に基づいた抽象的意味へと拡張したと分析できる。この場合、「手」の具体的意味の領域内に存在する〈身体部位〉としての意味をもつ「手」を参照点として、「手」を用いて行う行為にアクセスしていると考えられる。そこから【接触】のスキーマに基づいたメタファー的拡張が行われ、抽象的意味の領域における「手」を用いて行う行為へと拡張が行われていると考えられる。したがって、この場合もメタファーとメトニミーの融合による意味拡張であると考察できる。

V. “手”の「機能」に基づいたメタファー的拡張

「手」の「機能」に基づいた拡張も見られる。下に例を挙げる。

(16) 海蜇，(…中略)，属腔肠动物，形如伞状，“伞盖”底下有触手。

[クラゲは、(…中略)、腔腸動物に属し、傘状の形をしており、「傘の部分」の根本には触手をもっている]

(17) 这时只要操作者双手作什么动作，隔壁的“机械手”也会作什么动作。

[この時、マシンオペレーターが両手で何か動作を行うと、隣室の「ロボットハンド」もその動作を行う]

上の例は、人間の身体部位である「手」の「機能」に基づいたメタファーに基づいた拡張である。〈身体部位〉としての「手」の領域内における「手」が有する「機能」と別の領域に存在する「触手」や「ロボットハンド」の領域内の「機能」とが「類似」していることに基づいた意味拡張であると考えられる。また、例文(17)の場合、「手」がその機器その

もの名前となっていることから、「部分」で「全体」を表すメトニミー的拡張ということもできる。したがって、メタファーとメトニミーが相互に関連した意味拡張であると考えられる⁶。

VI. おわりに

本稿では、認知言語学の視点から「メタファー」、「メトニミー」の概念を用いて、現代中国語における身体部位名詞である“手”の意味拡張について考察を行い、その認知メカニズムについて分析を行った。以上の分析より、身体部位名詞“手”がメトニミー的拡張においては、「部分—全体」の関係、参照点構造に基づく拡張、【接触】のスキーマに基づいた拡張、「手」の「機能」に基づいたメタファー的拡張が行われていることを明らかにした。また、【接触】のスキーマに基づいた拡張における“手”が量詞として用いられる場合については、外部世界にある対象に【接触】し、その対象を〈主体が所有する領域〉に取り込むという経験に基づいた意味であることが分かった。更に、上述した身体部位名詞“手”の様々な意味拡張における認知メカニズムにおいては、メタファーとメトニミーが相互に関連しており、両者の融合した意味拡張が行われている点についても言及した。

現代中国語の身体部位名詞においては、本稿で扱った“手”以外にも、「頭」を意味する“头”、「目」を意味する“眼”、“眼睛”、“目”、「口」を表す“口”、“嘴”、「足」を表す“足”、“脚”、“腿”などといった身体部位名詞を挙げることができる。これらの身体部位名詞も“手”と同様に〈身体部位〉という基本義から他の様々な意味へと拡張しており、「メタファー」や「メトニミー」などの概念を用いて、その意味拡張における認知メカニズムを分析することができる⁷。今後は、他の身体部位名詞についても考察を行っていきたい。

参考文献

- 1) 日下部直美:試論現代汉语中有关“身体部位名词”的语义扩展问题. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科硕士学位论文, 2003
- 2) 榎山洋介:認知意味論のしくみ. 町田健・編, シリーズ・日本語のしくみを考える 5, 研究社, 東京, 2002
- 3) 佐藤信夫:レトリック感覚. 講談社学術文庫, 東京, 1978(1992)
- 4) 张丽群:试论身体部位名词作量词使用时的特征. 中国語学. 日本中国語学会. 248:199-212, 2001
- 5) 武柏索, 王淑文, 周国強・編, 中国語量詞 500. 中華書店, 東京, 1995
- 6) 日下部直美:试论“头”的基本义和语义扩展. 多元文化. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻, 5:201-211, 2005

例文検索

「北京語言大学中国語コーパス」:北京语言大学汉语语料库(BCC) (<http://bcc.blcu.edu.cn/>)

⁶ この他の例として、“人造手”も挙げることができる。

⁷ “头”の基本義と意味拡張については日下部(2005)を参照のこと。